

私の見た東京空襲

手塚 公夫

上鷲宮五丁目

昭和九年三月、私が小学一年を終った時、私たち一家は新潟から上京し中野の野方一丁目（今は四丁目）に転居した。その頃は野方を通る西武線の車両は一両か、長くても二両編成であった。家の近くは畑が広がり竹林や松林などもあり、鷺宮には水田さえあった。

昭和十六年、私が中学三年の時、太平洋戦争が始まった。翌年四月、ドウリットル隊B25十六機による東京初空襲があった。この時私は、今の港区芝の学校にいたが、数発の爆発音を聞いたに過ぎない。

十九年六月十五日、米軍がサイパン島に上陸した。本土空襲が必至のこととなり、政府はその月の三〇日には大都市の学童集団疎開を決定した。全国で四〇万人。東京では八月四日の第一陣から九月二四日までに二〇万三千人が疎開したという。家屋の強制疎開は既に行なわれており、私も新宿駅前や四谷区役所周辺の取壊し作業に動員された。大八車に壊した家の材木を積み、新宿東口の坂を下り、ガードをくぐり、西口の坂を上つ

て集積所に運んだ。倒した家の下敷きとなり死んだ学生もいたという。中央線の電車に乗ると、中野から新宿への沿線の両側は、倒された家が延々と続いていた。

そして、十一月二四日、B29による東京空襲が始まった。三鷹の中島飛行機武蔵野工場などの爆撃が最初である。この日、私は二駅離れた武蔵小金井にいた。私の学校に武蔵野工場の一部が疎開して来ており、そこに私は動員されていた。雲一つない晴天、中央線に沿って、一万メートルの高空を白く飛行機雲を引きながら、次から次へと編隊がやって来る。地鳴りのような爆発音が聞こえ、真つ黒な煙が高く上がるのがよく見えた。日本の戦闘機が編隊目がけて突っ込むと、すぐ白い煙を引いて落ちて行く。よほど防御が堅かったのだろう。武蔵野工場は「零戦」や「隼」などのエンジンを造っていた主力工場で、その後も空襲の度に爆撃された。尾翼を真つ赤に塗った戦闘機も見た。神雷特攻隊という体当たり機と聞いた。しかし私は、昼間B29の落ちるのを見た記憶はない。

ある日、B 29の来襲を畑の中に避難し眺めていたことがある。すると突然、機体の下に黒点が見え、それが肩墨を引くような放物線を描いた。爆弾だと思った時、空を圧する凄まじい音がした。私たち全員は思わず畑にひれ伏した。実際は十数秒に過ぎなかっただろうが、長く感じられた時間の後、爆発音が聞こえた。頭を上げて見ると学校の方に土煙が上がっていた。爆弾の落ちるのがあの様に見えるものだろうか。また、あのように凄まじい落下音がするものだろうか。戦後、音響爆弾というのがあったことを知った。特別に音が出る装置を付け、恐怖心を起こさせるのだという。工場に戻ると、工場のすぐ近くの空き地に大きな穴が三つあいていた。この小さな疎開工場さえ狙われたのだ。

三鷹の武蔵野工場へ連絡に行ったことがある。広大な平屋の工場は、屋根の鉄骨がねじ曲がって垂れ下がり、爆撃により盛り上がったコンクリートの床と接し、瓦れきの山の様になっていた。一トン爆弾が爆発した穴の大きさには驚かされた。本館の組立工場は、鉄筋コンクリートの五階位の建物が幾棟も連結した最新鋭の工場であったが、内部には至る所に爆発の跡があった。床や天井に丸い穴があいているところがある。爆弾の貫通した跡である。爆弾は数階貫いてから爆発したという。その為、空襲の時屋上に避難していたところ、今度は艦載機の空襲で銃撃にあい、多数の死傷者を出したことがあったという。最

盛時には五万人が働いたというこの工場も、九回に及ぶ空襲により壊滅した。

記録によれば、東京は終戦まで百二十二回、延べ四八七〇機の空襲を受け、死者は十三万人に及んだという。中でも最も悲惨なのが二〇年三月十日の空襲である。十日午前零時過ぎより二時間四〇分にわたり、三三四機のB 29から投下された焼夷弾十九万発により、下町一帯は灰じんに帰した。この日野方の家で寝ていた私は、空襲警報で服装を整え窓を開けてみると、すでに東の空が半円形に真っ赤になっていた。二階の屋根に登ってみると突然強風が吹いてきた。身を伏せ屋根につかまりながら、私はこれは途方もない大火災だと思った。そして、この火災の下の惨状を思いながら夜を明かした。

奇しくもこの日は、千葉の柏に入隊していた兄の初めての面会日だった。朝になり、母と私は、ともかく行けるところまで行ってみようと八時頃家を出た。今なら一時間半もあれば楽に行けるところを、八時間かかって夕方の四時過ぎにようやく柏の兵舎にたどりついた。途中、焼けただれた衣服を着て身一つで逃れて来た人に何人も会った。

暗くなった面会所で兄に会い、乏しい中から工面して持ってきたふかしいも、まんじゅう、お握りなどの入ったトランクを開けた。すると、回りからワツと知らない兵士が寄ってきて、勝手に手を伸ばして奪っていった。兄は「よせよ、よせよ、お

れのだぞ」といいながら、手当たり次第ズボンの中に突っ込んでいた。兄は、後で便所の中で食べるのだという。たちまち空になったトランクを呆然と眺めていた母に「おばさん、何か下さい」と一人の兵士が寄って来た。兄はズボンの中から一つ出してやった。兵士は飢えていたのだ。暗たんとした気持ちを抱いて、母と私は夜中近く野方の家に帰り着いた。

数日後、上野近辺に行った時、防空壕の中で焼け死んだ人が数人掘り出されて、道路に置かれていた。背面が真っ黒に炭化し、身体を猫のように縮めすっかり小さくなっていた。

大きな夜間空襲は、その後も四月に二回、五月には二四日未明にあり、翌二五日夜にまたあった。特に二五日の空襲は山の手方面だった。空襲警報と共に身支度し、布団も防空壕に入れ蓋をし土をかける。まだ土をかけているうちに、ザーザーと豪雨のように焼夷弾の落下する音がする。一つの爆弾が空中でさく裂し、七二発の焼夷弾となって落下するのだ。土をかけながら体が震えた。防火用水はあるが、大きな器にはすべて水を入れ、家の各所に配置する。準備が終わってようやく落ち着いた。

家の横を流れる小川の石橋の上に立って、父と空を眺めた。爆弾が空中でさく裂し、破片がひらひらと火の滝のようになって落ちてくる。「きれいだ」と思った。二階から「あら、あら、すごい」と叫ぶ母の声がした。

低空で侵入してくるB29が、探照燈で捉えられ、くつきりと

空に浮かぶ。そして突然火を吹いて落ちて行く。戦闘機も活躍しているらしい。曳光弾が赤く明るい点線を描く。既に家の東と南は真っ赤に燃え、西にも数箇所火が見える。二階に上がり窓を開けると、熱風が顔に吹きつけてくる。炎に包まれた二階屋が一時に崩れ落ち、「ぱっ」と火の柱が立ち火の粉が舞うのがはつきり見えた。

家から百メートルまでに迫った猛火も、幸い道路一つで止まった。空襲が終わってもこの夜は寝るどころではなかった。朝には沼袋の親戚が焼け出され、身一つで逃れて来た。焼夷弾の直撃にあって死んだ人もいたという。

広島に新型爆弾（原爆を当時はこう言った）が投下されてからは、一機、二機の来襲でも空襲警報が出され、私も防空壕に入った。ある日、壕の入口で頭上を通るB29を眺めていると、頭部と尾部を失い翼と胴だけになった戦闘機が落ちてきた。私の家の真上である。ひらひらとゆっくり落ちてくる。このまま家に落ちたらと冷や汗が出たが、幸いに近くの畑に落ちてくれた。体当たり機であったようだ。

焼け跡の夜は暗い。曇りの夜などは真っ暗である。どこが道路かさえわからない。

八月十五日、その暗い夜も明けた。